

第3回 AI共生型社会実現促進ワークショップ

開会のご挨拶：
ヒトとAIが互いに価値を高める社会をめざして

2025年9月11日

独立行政法人情報処理推進機構 理事長 兼
デジタルアーキテクチャ・デザインセンター長

齊藤 裕

はじめに：

ワークショップ開催にあたって



今私たちが目指す社会は：

- 人の知識・経験・行動から生成されるデータをAIの力で最大限に活用して新たな価値を生む、ヒトとAIが双方の役割を果たして全体最適を実現する**AI共生型社会**

その実現の前提となるのは：

- AI の安全性・信頼性・品質を確保するとともに、経済的・持続的に **AI を活用して社会課題を解決するためのアーキテクチャ設計とエコシステム構築**

当ワークショップにて皆様と行っていきたいことは：

- イノベーション推進とリスク対応の両面を考えつつAIの社会実装を進める取り組みから学び、**AI共生型社会実現に必要な産業競争力の源泉としての知見・ノウハウを集積**

ただの「事実・事象」を「知識」に変えるプロセスへ

AIが変えた、データを「資源」とするということの意味



「データを資源にする」とはということなのか？

AI実用化前は：

「情報」として活用すること

分析の材料として存在：

「専門家」がデータを収集・蓄積し、統計分析やマーケティングに活用する

人間の意思決定を補助：

人間がデータを読み解き、戦略や政策の根拠として使う

資産として蓄積される「ストック」に価値：

CRM（顧客管理）やPOS（販売履歴）などのための情報資源となる

人間が使うための道具

データを活用する専門家が必要

人間中心の社会・産業

データは人間に「使われるもの」

保存・分析対象であり、「モノ」としての静的な存在

データそのものの
存在価値

データの位置づけ

価値創出の前提

データをめぐる
パラダイムシフト

AI実用化後は：

「知識」として付加価値を生むこと

AIの燃料として存在：

機械学習モデルが学習・推論するための原料

自律的に価値創出：

人間を介在させずAIがデータを自動で処理・判断

リアルタイムで処理される「フロー」に価値：

IoTやセンサーからのデータをAIが即座に処理・活用するプロセスが前提

AIが使うためのエネルギー源

人間の介在なく自律的に価値が生まれる

AI中心・データ駆動型の社会・産業

データはそれ自体が「価値を生み出すもの」

「コト」として状況によりアクションを生む動的な存在

「Society 5.0」として実現される、データとアルゴリズムが牽引する「コト」の時代

AI・デジタル革命によるデータ駆動型社会のかたち



第一次～第三次産業革命まで続いた
プロダクトアウトな「モノ」の時代



第四次産業革命から加速する
インタラクティブな「コト」の時代



動力源としてのエネルギー

インプット＝資源の
かたちは？

社会活動からのフィードバック
としてのデータ



エネルギーから「モノ」を
(作る側が考えた「利便性」)

アウトプットの
かたちは？

データから「コト」を
(ユーザーの課題解決)



エネルギー→動力→生産活動

価値変換の
プロセスは？

データ→情報→知見 (インサイト)



プロダクト

期待される
最終成果物は？

イノベーション



プロダクトとサービスの
量産・流通で快適な生活を可能に

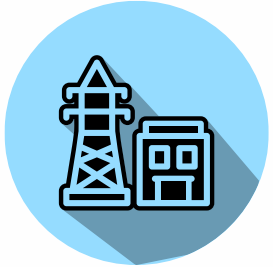
目指す
社会の姿は？

データをもとにAIを介して
生活を豊かで便利に

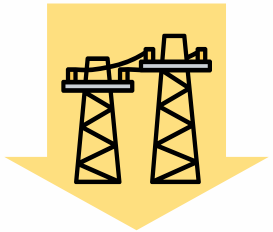


目的を定めず「大量のデータがある」というだけではデータ駆動型社会は実現しない

イノベーションを届けるための道となるインフラが必要



燃料・エネルギーを
資源に発電された
電気が



広く一般家庭で
使われるのは
それを届ける電力網
ができたから



データを資源に
生成された
知見・ナレッジが



さらなる価値を生むのは
それをサービスとして
ユーザーに届ける
「道路網」があればこそ

- ◆ **イノベーションの社会実装には共有のためのしくみ・基盤が必要**
 - ・ 賛同者の確保と共有で**投資効果が極大化**
 - ・ 末端の1ユーザーあたりの利用コストが下がり、**ユーザー数拡大・普及**が可能に
- ◆ **皆でイノベーションを共有する基盤としてのユーティリティ・インフラ作りがまず必要**
 - ・ **ビジネスモデル実装に必要なインフラへの投資を**まず行ったアマゾンが覇者に
 - ・ テクノロジーを進歩させるだけでなく、**恩恵を皆で継続的に享受できるしくみ・インフラづくりが必要**
 - ・ データ駆動型社会の基盤は価値を共有するための「網」= **データ連携を可能にするアーキテクチャ**

人間によるデータ管理と育成が左右するAIの品質

データで学習するシステムとしてのAI

- ▶ インプットされるデータの質でAIのパフォーマンス品質が決まる
 - AIは**環境の変化に対応し、学習により進化**するシステム
 - 「一度きちんと作ればOK」の単品プロダクトとは違い、**継続的な品質管理**が必要
- ▶ 安全で信頼性の高い社会実装には**システムとしてのアーキテクチャ**が重要
 - システム思考に則り、配置や環境も考えてシステム全体として開発・実装

人間を代替・支援する存在としてのAI

- ▶ データを通じて**人間同様の多様性**を持つ
- ▶ PCの汎用化同様、AIも**普及・オープン化**でアルゴリズムによる差別化が難しくなる
- ▶ アルゴリズムではなく、**トレーニング（教育データ）の内容・質で品質が決まる**
- ▶ **人材を育成する代わりにAIを育成**してオペレーション品質を向上しようとする時代に

おわりに：

今回のワークショップで目指すこと



データ・AIの力での社会課題解決と切り拓かれる**未来の姿**、その**社会実装**についての**課題・施策、信頼性・品質**について、ともに考えていきたい

- 医療・ヘルスケア分野の課題解決での効果的なAIの利活用とは
- 健康や生命等に関わるAIの安全性・信頼性をどう考え、デザインしていくべきなのか

医療・ヘルスケアをテーマに、AIを利活用した**効率化・自動化、安全性向上**の取り組みを進める有識者の知見・経験から学びたい

- それぞれの分野での実装にあたり、**現状の課題と今後への示唆**をどう捉えるか
- そのうえで**ヒトとAIがどう役割を分担し、協調**してゆくべきなのか

A low-angle shot of a hand reaching up to touch a large, curved, metallic structure, possibly a piece of art or a futuristic building. The background is a bright sky with scattered clouds. The text "IPA、次の時代へ" is overlaid in white.

IPA、次の時代へ